

---

# Back-home of the Dead

満腹太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Back - home of the Dead

### 【NZコード】

NZ2229Y

### 【作者名】

満腹太

### 【あらすじ】

世界が終つた。死者が蘇り生存者を襲う。そんな世界に一人取り残された主人公は実家に帰ろうと活動を始める。

死者が生存者を襲い生存者が生存者を襲う。彼はこの世界で生き残る事は出来るのか。彼は実家に辿り着けるのだろうか。

## 第一話 やまとなら日常

201×年5月、世界が終つた。

通りには死人が歩き回り、生きている人を求めて徘徊していた。

事の始まりは誰も知らない。

隕石の落下や研究所からウィルスが漏れたなど噂はあつたが、その本質は誰も知らなかつた。

警察への一報はただの喧嘩の知らせだつた。

繁華街での喧嘩。その町では良くある光景だつたのかも知れない。

ただ一つ違つたのは喧嘩ではなく、食事だつた。

のど元を食いちぎられた若者は救急隊に噛みついた。隊員は動脈を噛み切られ激しい出血の後、苦しんで死んだ。

しかし、死んだ隊員は直ぐに起き上がり周りの隊員に噛みついた。噛みつかれた隊員も同じように苦しみ死んでいった。

そして、蘇った隊員達は辺りの警察官や野次馬に襲いかかつた。

爆発的に広がる死の連鎖。

日本は数日で死者の数が生者の数を上回つた。

第一話 セヨウナリ田常

13：34

港に漁を終えた漁船が帰ってきた。

普段の漁港なら周りにも同じような船が並び騒がしくも温かい歓迎を受けていた。

しかし、帰ってきた港には人の気配が無かった。

「あれ？誰もいないな。」

「ああ、変だな？何かあったのか？」

若者は船の先端に立ち港を見回した。

その後ろの操舵室の小窓からひらの過ぎの男が答えた。

「おやじさん、とつあんず接岸しましょ。」

「おつ、船長と呼べ。」

船が接岸すると若者がロープを持ち岸に昇り固定台にロープを固定

した。

「俺は事務所に行くつてみる。組合の誰かはいるだろ。」

「了解、船長。」

「おひ、魚を下ろす準備をしとけよ。」

船長はすぐ近くにある建物の事務所に向かつて歩き出した。  
若者は船の計器のチェックを行った後に船の床にある魚倉の蓋の前で立っていた。

漁港の奥からヨタヨタと上半身を揺りしながら誰かが一ひきに歩いて来るのが見えた。

(あれは・・・酔っ払いか?)

若者は近づいてくる男を見ていた。

「林さん。」

若者はその男、林に声をかけた。いつも通りの掛け声。普段ならこの後に林から漁の事を聞かれるのが常であった。

しかし、林は何所か焦点の合っていない目で若者の方を見ると少しだが歩く速度が上がった。

「林さん、どうしたんですか?」

若者が声をかけても林は低いうなり声を上げるだけだった。

林が岸から船の上に降りる為に一歩踏み出したが、そこには地面が無く林は船と岸の間の70センチ程の隙間に落ちてしまった。

「林さん?!」

若者が海の中を覗くが、林は溺れる仕草もせずに海の底に消えて行った。

「おう、大丈夫か?」

若者が岸を見上げると船長が立っていた。

「今、林さんが落ちた!」

「ああ、俺も見てた。今、事務所に行つたが、…なんつーか、人に食べられてた。」

「はあ?何言つてんスか?ボケるにゃ早いでしょ?」

「ああ、俺もなんだかよくわからんが、とりあえず何かが起きてんだな。」

「そつかもしそれないですけど、…あ、あれはマリちゃんだ。」

建物の窓から女性が歩いているのが見えた。若者はおーいと声をかけるとその女性が若者の方に振り向いた。

その顔の半分が無く、腕も片方しかなかつた。

「・・・あれで生きてると思つか？」

「いや、無理ひしょ。どう見てもアウトでしょ。」

マリちゃんと呼ばれた女性は片腕で窓を何度も叩いていた。

ガラスの割れる音がすると、女性は窓に寄りかかり落ちるように這い出ってきた。

2人の男はホラー映画を見るようにじこか現実離れした感覚でその光景みていた。

「船長、どうします？」

「…ん、とりあえず逃げる。車まで走るぞ。」

「了解。」

2人は女性を無視して駐車場に向かった。

駐車場に行くには市場の中を通らなければ大回りでしか行く道が無かつた。

2人は市場を抜ける道に自然と足が向いていた。

市場の中には数人の人が歩いていた。しかし、その姿はどれも重傷者を思わせる怪我で2人は生きているとは思えなかつた。

「ひでえな。何があつたんだ？」

「さあ？ 分りませんが、とりあえずは尋常じゃないって事ですね。」

2人は床で数人に食べられている男を見ながら声を潜めながら歩を進めた。

市場を抜け外に出ると、そこは今まで以上の人数が歩き回りついた。

「なんじゅ ロリヤ。」

船長が呟いた一言で数人が反応し、2人に近づいてきた。

「クソッ！ 近づく奴はぶん殴るぞ！」

船長の脅しにも構わずに近づいてきた。

「ちくしょうめ！」

船長の近くにいた男に押すよに蹴りを入れると男は数人を巻き込んで倒れた。

その倒れた音でさらに数人が反応し、こちらに歩み寄ってきた。

「船長、行きましょう。こいつら何か変ですよ。」

若者が船長の腕を引いた。

「お、おっ。お前の車でいいか？俺の車の鍵は船と一緒に着いてるからな。」

「ええ、船には戻りたくないですからね。こつちです。走りますよ。

」

若者が走り出すと船長も続いて走り出した。

人のいないルートで若者の車に辿り着いた。若者は鍵に着いたリモコンでロックを外し運転席に乗り込んだ。

すぐに船長も助手席に乗り込んできた。

「とりあえずロックをお願いです。」

「お、おう。」

2人はロックを確認すると、やっと一息つけた。

「これからどうします？」

「ん？まずは家に行つて力=さん助けないとな。あとは、娘夫婦と孫が心配だな。」

「そうですか。船長は奥さんと仲がいいですからね。それじゃ、船長の家にいきましょ。」

若者の車の周りには少しずつだが人が集まってきた。どの人も焦点の合っていない目、首や顔に大きな傷をもち、中には内臓が飛び出している者もいた。

「なあ、あいつらって生きてると思うか？」

「知りませんよ、車出しますよ。」

「おいおい、前に人がいるぞ。轢くのか?」

「轢いたら車が汚れるでしょ。クラクション鳴らしてどうでもらい  
ます。」

「  
！」

若者がクラクションを鳴らすと付近にいた者が一斉に振り返り車を  
みた。

「おい、あいつら音に反応しないか?」

「え? そうですか? あ~ も~ 邪魔だなー。あー俺の車を叩くな!」

「おい、いいから出せ!」

「え、でも・・・」

「早くー出すんだ!」

船長の迫力に若者が負けた。

「わ、分りました。」

車はゆっくりと進んで行き、数人の男が車の前に立ちふさがった。

車は男たちを避けながらも進んで行つた。

バックミラーには車を追つよう多くの人々が追従してきたが、車は彼らの歩よりも早く徐々に差が開いてきた。

しばらくして2人の乗った車は港の外に出ることができた。

そこで2人が見たものは、商店に突入した車、ガードレールに衝突し燃えている車が見えた。

幸い道路はスピードを出さなければ事故車を避けて通行できる状態だった。

「なあ、どう思つ?」

「は?何をですか?」

「だから、この状況だよ。夜からの漁から帰つたらこんな状況だろ?警察はどうした?ラジオは何いつてるんだ?」

「え~とレイディオですか。…あれ?受信できない。おかしいな。」

「

「お~、さつわといくぜ。カミさんが心配だ。」

「了解、船長。」

車は事故車両を避けつつゆっくりとだが船長の家に近づいた。

「あ~、交差点無理っぽいですね。」

田の前の交差点はたくさんの車で埋め尽くされていた。

「おひ、仕方ない。周り道でいくべ。」

「了解。船長。」

車はバックで来た道を戻り、細い道を抜け船長の家に辿り着いた。

もちろん、その間には人が人を食べる光景を何度も見ていた。

船長の家は2階建ての普通の民家。ガレージには奥さんの車が止まっていた。

そして、もう一台の地域外ナンバーの車が奥さんの車の隣に止まっていた。

「おひ、だれかいねえか?!」

船長が家に着き玄関を開けると大きな声で叫んだ。

そのまま船長が家に入つていった。その姿を若者は車の中から眺めていた。

30分ほど経ち、船長が戻らない事に不審に思つた若者が家の中に入つて行つた。

失礼には当たるが玄関で靴を脱がずに、リビングのドアをゆっくりあけた。

そこには船長が倒れていて、その腹の辺りを2人の女性が内蔵を食

べていた。

1人は若者が見たことある船長の奥さん。もう一人は写真でしか見たことないが、船長の娘だった。

若者は2人に気がつかれないようじゅうくじとドアを閉めた。

力チャヤリとドアノブを閉め若者が家を出ようとすると、リビングのドアをたたく音が聞こえた。

若者は怖くなり走つて車に戻った。運転席に乗り船長の家の玄関を見ると先ほどの2人の女性がこちらに向かつた歩いてきていた。

(ヤバい！ヤバい！)

若者はエンジンを掛けアクセルを踏んでその場を離れた。

彼がいる町はT市。県の最東にあり日本国内でも有名な漁港の町。そこで『船長』の下で働いているのが

阿久津 厚 (あくつ あつし)

高校卒業後数年ほど働きもせずに家でゲーム三昧の日々だった。

母親はそんな彼を見ていつかは立ち直るだろうと楽観視していた。

父親は仕事の忙しく息子の事は母親任せだった。

そんな厚を見た父親の友人の船長は『根性を叩き直してやる…』と拉致に近い形で連れ去つて行つた。

厚も最初は嫌がつたが、船に数回のると漁業の楽しさが分り、将来は自分の船を持ちたいと思つよつになつた。

それから4年経ち、厚が26歳になる少し前の出来事であった。

(船長…なんで、死んじゃつたんですか…)

厚は誰もいない駅前のロータリーをぐるぐる回りながら考えていた。  
(どうする、携帯は回線が込んでて繋がらないって言つてるし、こ  
こでぐるぐる回つていてもしかたない。)

溜息をつく厚は駅前のマクドナルドが目に入った。

(あ～あそこのお嬢さん可愛かったのに…。やっぱダメなのかな  
?)

厚はカワイイ女の子の事を思い出した。

(だけど、ここにいても仕方ない。万が一、いや、億が一の確率で  
マックのカワイイ子が生きてて助けを求めていたら?「

気がつけば声に出していた厚はマクナルドの前の歩道に車を止めた。車を降り店内に入つていった。

普段なら「いらっしゃいませ」と笑顔で迎えてくれる彼女はいかつた。すでに変わり果てた彼女がカウンターの向こうで歩きまわっていた。

厚はその様子を見ると横に小さく首を振りながら店を出た。

車に戻り、一息ついた厚は車を家の方向に走らせた。

いつもならマクドナルドから10分も掛からない道を誰も轢かないよう走ったため20分以上かけて家に着いた。

彼の家は線路沿いにある2階建のアパートで202号室に住んでいる。両隣は空いているが204号室には若い夫婦と2人の子供が住んでいた。

カンカンカンと軽い音をしながら2階に上り、部屋に入った。電気を付けて部屋を見回すが、部屋を出た時と何も変わらなかつた。

「ンビリ弁当の『』や脱ぎ散らかした服。いつもの光景がそこになつた。

パソコンの電源を付け情報を集めようとしていた。

インターネット上には現代の奇病や、ウイルス性のなどの話があつたが警察の動きや政府の行動が何もなかつた。

(警察の動きが削除されたのか？機能していないのか？)

厚は分らなかつたが、どちらにしろ実家に帰ろうと彼は考えていた。

仕事ばかりの父は職場にいるだらうが、母せりと家にいるだらう。

彼の実家はK市。

K市からK市までは高速道路をつかえば2時間ほどで行ける距離である。

K市は県の西側にあり、そこに行くには山を超える必要があった。

厚は情報らしい情報が無い事に溜息をつくと布団に横になつた。

(船長、林さん、マリちゃん、何で死んじやつたんだ…)

死んだ人たちの事を考えていたが、厚は直ぐに寝てしまった。

23：44

厚は空腹から腹が覚めた。

携帯の時間を見るともう直ぐ日付が変わらうとしていた。

(冷蔵庫に何かあるかな?)

寝ぼけた頭で冷蔵庫にあつた野菜を使い簡単に野菜炒めを作った。

食事を終えた厚はシャワーを浴びた。

シャワーを浴びている最中に浴室の窓を叩く音がした。

厚が窓を見ると茶色い髪と女性の影があった。

204号室に住む家族で20代前半の奥さんとは顔見知り程度ではあつたが知っていた。

浴室の窓は換気の為に使うもので、人が入る事が出来る高さと大きさでは無かった。

窓が割れるとそこには、口元が赤く血まみれの204号室の奥さんが立っていた。

焦点が合わない虚ろな目、低く唸る声。

厚は裸を見られた事よりも、普段は明るく感じの良い女性の変わり果てた姿に昨日の出来事は夢では無かつた事を思い知った。

厚はシャワーを止め静かに浴室から出た。

急いで着替えて旅行鞄に食糧を詰め込んだ。

買い物に行くのが面倒な時に缶詰を使った食事をしていた彼は、多くはないが部屋に置いてある缶詰を鞄に入れた。

鞄は重いがキャスターがあるので何とか移動はできるだろう。

その前に…

(部屋の前にいる彼女をどうにかしないと…)

暫く考えた厚だが、結局良い考えが浮かばなかつた。

仕方なしに出了と、「勝負と意氣込んだ厚は部屋のドアをゆっくりと開けた。

部屋のドアから顔を少し出し様子を見ると女性が204号室に入るのが見えた。

厚はゆっくりと鞄を担ぎ静かに1歩を踏みだした。

階段を降りようとしたら時に鞄が手すりに当たり小さいがコンと音がなつた。

厚が振り向くと204号室から女性が出てくるのが見えた。

階段で襲われたら危ないと感じた厚は階段を昇り女性と向き合つた。

鞄を床に置くと、女性が腕を前に出しながら厚に近づいてきた。

厚はその腕を掴みながら、これ以上近づかれないように力を込めた。

「ちょ、ちょっと、待って。あなたの気持は、大変うれしいですが、不倫は良くないです。旦那さんや、子供を、思い浮かべてください。こんな、こと、したらあなたの、家族が、悲しみますよ。」

見当違いな説得だが彼女の反応は無く、厚に噛みつひとつと抵抗を続けていた。

「…ツクソー仕方ないか…」めんなさい…」

厚は力を込めて彼女を2階の通路から柵の外に投げた。

ドスンと音がして柵から1階を覗くと、彼女は頭から血を流し動く気配が無かつた。

厚は初めて人を殺したが、緊急事態と自己防衛と自分に言い聞かせながら鞄を持ち車に乗り込んだ。

1・42

エンジンを始動するとラジオから緊急通信が流れた。

『…こちらは臨時政府です。只今日本国内で非常事態宣言が発令されました。家にいる方は施錠をし、誰が来ても決してドアを開けないでください。また、移動中の方は最寄りの避難所に避難してください。繰り返します…』

(臨時政府? 非常事態宣言?)

厚は車をゆっくりと走り出した。

自分以外に動く車が無かつた。

車が繁華街を走っている時に前方から小さな明かりが近づくのが見えた。

窓を少し開けると男の声が聞こえた。

「お　い！待つてくれ！俺も乗せてくれ！」

大きな声で叫ぶ彼の後ろには数人の奴らが追いかけていた。

彼の前方からも声に反応した奴から彼に向かつて行った。

「ああ！来るな！待て！ああ、ぐあああああああ…」

前からも後ろからも包囲された彼は抵抗空しく奴らの食事になり果てた。

(そんなに大声を出すから！)

心の中で叫んだ厚は奴らのいない方向に向かつて車を走り出した。

道路には何人かの奴らがいた。

そのほとんどが食事中で車のエンジン音に反応し追いかけてくるが、やがて引き離されて行つた。

暫くすると車のガソリンが少ない事に気が付いた。

繁華街を抜け24時間のスタンドに向かつた厚が見た物は、勢いよく燃えるガソリンスタンドだった。

もう一つある24時間のスタンドは多くの車が雪崩れ込んでいて自分の車を給油できる状態ではなかつた。

また、いくつかの車の中には奴らがいるのが車のライトに照らされその姿が確認できた。

暫くすると車が完全に止まつた。仕方なく車内で缶詰をいくつか食べ、少しだけ軽くなつた鞄を掴み近くのコンビニまで歩いて移動した。

その距離200メートルだったが、厚は生きた心地がしなかつた。  
道には奴らの食べ終わつた元人間が横たわり無残な姿をさらしてい  
た。

厚はコンビニが見えてくると、ホッと溜息をついた。

電気が付いた明るいコンビニの店内には2人の奴らがいた。

1人はコンビニの制服を着た女性。

もう一人はコンビニに商品を納品する配送車を運転する男性スタッ  
フだった。

( こりはコンビニのトラックを借りよ。中に商品があるかもしれ  
ないし。 )

厚はトラックを調べるとドアには鍵がかかっていなかつた。

ゆっくりドアを開け、鍵が刺さつたままの状態を願つたが、その願  
いは無駄に終わつた。

コンビニの中にいる彼が持つてゐるのが確定した厚はゆっくりと店  
内に入った。

## ピンポン

自動扉のチャイムが鳴ると2体の奴らは厚に向かつて歩き出した。

厚はカウンターを飛び越え奴らから一定の距離を取った。

2体の元人間は飛び越えることを知らないのか手を出して厚を捕まえようとするだけだった。

厚が少し後ろに下がると何か柔らかいものを踏んだ。

ゆっくりと足元を見ると、人間の腕が落ちていた。

(もう、人間じゃないんだ！それなら…)

厚はレジを持ち上げ女性に向かつて投げた。ケーブルが繋がつっていたが、厚はそれを纏めて近くのハサミで切断して女性に投げつけた。

レジは女性の頭部に突き刺さり女性と一緒に地面に倒れた。

もう1体の男は女性の事を無視し、いつまでも厚に向かつて手を伸ばしていた。

辺りを見回した厚が見つけた物は電子レンジだった。コードを抜き持ち上げて男に投げた。

頭部に当たったレンジはガシャンと大きな音を立てて床に落ちた。

男も倒れた衝撃でポケットから車の鍵が飛びだした。

(ラッキー！これで死体を触らないですむ)

そう、考えた厚がカウンターを飛び越えるとコンビニの奥の扉が開くのが見えた。

そこから3体の奴らがゆっくりと歩いてきた。

(ヤバい！3人も相手にしてられない！)

鍵を拾い、自動ドアを急いで出てトラックに乗り込んだ。

トラックのエンジンを始動しガソリンが半分ほどある事を確認すると車を走らせた。

厚はトラックを大きな公園の駐車場に止めた。

ここまでなら通常で15分の距離を数時間かけている事に気が付いた。

肉体的な疲労よりも精神的な疲労で暫く休憩しようと思つた厚はトラックの鍵を確認すると座席を倒し仮眠した。

太陽の光を受けた厚はその眩しさで目が覚めた。

周囲に奴らの姿は見えなかつた。道路を挟んだ反対側のマンションにも人の気配が無かつた。

しかし、マンションのベランダを見ると数体の奴らが部屋とベランダを往復していた。

小腹が空いた厚はトラックの荷台に何か有るかも知れないと思いつラックを降りた。

周囲を警戒しながらトラック後部の扉をゆっくりと開いた。

徐々に明るくなるコンテナの中には空の籠や台車だけで何も入ってはいなかつた。

厚は大きくため息をつき扉を閉めた。

運転席に戻るとトラックを走らせた。

厚の乗つたトラックが奴らを轢かないように避けながらゆっくりと国道の道を進んだ。

(あれ? 奴らの数が急に減つたぞ。…もしかして生存者がいるのか?)

厚はスピードを落とし周囲を見ながら進むと中学校が見えた。

そして体育館の扉の前には100体以上の奴らが扉を破ろうとしていた。

(これはヤバい！何とかしないと…)

そう考えた厚だが、具体的な策が思いつかなかつた。

(持ち物は何もない。あるのは車だけ。車で突っ込むとエンジン部分が奴らを轢いた衝撃で壊れる可能性もある…どうするか)

考え付いた作戦は、奴らに對してバックで当たる事にした。

校庭にトラックが入り数体の奴らが反応した。厚はサイドミラーで後方を確認しながらギアをバックに入れアクセルを踏み込んだ。

勢いよく後ろに進むトラックに先に反応した数体を轢き、そのまま奴らの群れの中に勢い良く進んだ。

ハンドルに嫌な感触を感じながら、ある程度進むとブレーキを踏みギアをドライブに入れてアクセルを踏んだ。

奴らの群れから出たトラックは数十メートル先まで進み、もう一度バックで奴らの群れに進んだ。

其れを何度も行つと体育館の扉の前の奴らは動くことを止めた。

厚は校舎周囲をトラックで一回りし奴らがいない事を確かめた。

もう一度、体育館の扉の前までくるとクラクションを鳴らした。

プー、プー

生存者がいるなら何かしらのアクションがると考えた厚だった。

そして体育館の扉の中から音がした。

「ドン、ドン、ドンドンドンドン...」

体育館に避難した人は全滅したようだった。

「おじさん、助けて！」

不意に聞こえた声は体育館の2階の窓からだった。  
そこには男子中学生がいた。その後ろには2人の女子中学生の姿も見えた。

厚は窓から顔を出し声をかけた。

「おい、大丈夫か？ 生存者はそれだけか？」

「はい、俺たちだけです。助けて下さい。」

「ああ、トラックを窓の下に着けるからこいつにどうび乗れ。」

「は、はい。やってみます。」

厚が車を動かし窓際に車を止めた。直ぐにドスンドンドンドンと3つの衝撃音が聞こえた。

厚は窓から顔を出し3人に安全な場所に動かすから姿勢を低くしていようと伝えた。

トラックは静かに動き出し校庭のほぼ中央でとまつた。

トラックの荷台から下りた3人はそれぞれ自己紹介をした。

髪の毛を少し茶色に染めた少しチャラそうな男子は「後藤雄一」

ショートヘアで茶色に染め少しタバコ臭い女子は「篠崎いづみ」

髪の毛が黒く少し背の低い女子は「加藤智子」

後藤と篠崎は付き合つているのかトランクから下りる時にお互いが  
フォローし合つていた。

しかし、加藤が下りると、2人は全く手伝おうとしなかつた。

そして自己紹介の時の立ち位置からも2人と加藤は何か壁のような  
ものがあるように厚は感じた。

「中では何があつたんだ?」

「噛まれた人が苦しんで死んだ後に動きだしたんです。保健の先生  
が死んだのを確認したつて聞きました。」

「ふーん、それであんな所に避難したのか。」

「はい、あそこに行く扉は一か所ですし、誰にも見つからない様に  
2人で隠れて逃げましたからね。」

「2人?」

「俺といづみです。加藤は最初からあそいました。それで阿久津さんはどこにいくんですか？」

「ああ、俺はK市にある実家に帰るとこなんだ。」

「K市つてここから100キロ以上ありますよ！何所かに避難したほうがいいんじゃないですか？」

「ん~、避難所つてどこにあるか知ってる？大抵は学校が避難所だよな。それなら此処に残るか？」

「い、嫌ですよ。大人なんですから子供を安全な場所に送る義務があるんじゃないですか？」

「どうなんだろ？ね。警察も動いてないし、政府も当てにならない。生き残りたければ自分で進む道を選択するんだ。」

「ちょっとオジサン！私達を助けてよー！」

後藤と話をしていた厚の横から篠崎が口を出してきた。

「オジサンね、まあ、いいや。ここ屈たくなればトライックに乗りな。好きなどこりで下してやるよ。」

「そう、ありがとうオジサン。」

そう言つと運転席に厚が乗り込み助手席側から加藤、後藤が乗り込んだ。

「ちょっと、私乗れないんだけど。」

「ああ～、どうしようか？…そうだ！篠崎さんは後藤君の膝の上に乗るんだ。どうせ2人は付き合ってるんだろう？」

「ええーー加藤降りうよーおまえ邪魔なんだよ。」

文句を言つ篠崎に厚が加藤を庇つよつこいつた。

「本人の意思がなきや下ろさんよ。後藤君の膝の上がいやなら俺の膝になるけどいいかな？」

「・・・わかったわよ。我慢する。」

篠崎が後藤の膝の上に座つた。後藤は手を篠崎の腹の前で組んで車内でイチャつき始めた。

「出発するだい。降りたければ早めに言えよ。」

「」「」「はー」「」

3人の揃つた返事を聞いた厚はアクセルを踏み校庭を出て国道に戻つた。

彼らの先にあるのは希望か絶望か？

生き残る為の選択は？

厚は人の愚かさに絶望する・・・

## 第一話 やるやかなり日常（後書き）

地名、人物などはフィクションです。

林さんは黒ぶち眼鏡の人じゃないですし、マリちゃんはX-1子持ちには見えない美人さんではありません。

船長は奥さんと孫の話で2時間以上も、部下を拘束する人ではあります。

マクドナルドの店員さんでカワイイ子が多いと思います。

主人公はもうひとつのフィクションです。

阿久津は顔がすく濃く、警察からパスポートを提示された人ではありません。

どこにでもいそうな若い兄ちゃんです。

170程で普通体系。髪は短髪の黒です。が、基本はタオルを巻いています。

## 第一話 必然の出会い 運命の別れ

「ふああああ、すげえ眠い。」

大きなあぐびをする厚を見ながら加藤は微笑みながら答えた。

「少し眠ったうどうです？」この家は安全でしょ？一泊じゃなくて、しばらくはここにいてもいいんじゃないですか？」

「それも考え方だな。少し眠るから、何かあつたら蹴つてもいいから起してくれよ。」

「わかりました。」

厚はソファに横になると直ぐに寝息が聞こえてきた。

Back-home of the Dead

トラックは奴らの食べ残しを避けながらゆっくりと国道を進んで行つた。

「阿久津さん。そろそろご飯にしませんか？」

後藤が厚に空腹を訴えた。

「飯か……」

「そうよ、私たちは育ち盛りなんだから、ご飯ちょうどだいよ。」

篠崎は空腹からかイライラしている。

「でも、食べるものあんまりないだ。」

荷台の中に厚が持つてきた缶詰がいくつもあるが、4人で食べると2日も持たないと厚は考えた。

「この近くにコンビニあるかな？奴らがいなければ持つてくるけど。」

「コンビニはないんですけど、大型スーパーならありますよ。地元の人間ならそこで買い物しますから良く知っています。」

「スーパーね。そこに行こうか。案内よろしく。」

トラックは後藤の案内でスーパーに進路を変えた。

12・53

「これは無理っぽいな…」

「そうですね。」

郊外の大型スーパーの駐車場に着いた。

駐車場はかなり広かつたが、駐車してある車は半分にも満たなかつた。

スーパーの入口にはシャッターが下りているのが遠くからも確認できた。

そのシャッターの前には、100人とも、200人ともいえる人数の奴らが入口に押し寄せていた。

裏口の従業員出入口にも多くの奴らがいた。もちろん、搬入口にも多くの奴らが見えた。

このスーパーに最低でも300人以上がいると厚はかんがえた。

「あ、生存者がいる！」

後藤が指を射す場所を見ると、そこは屋上だった。

「屋上か。あそこは大丈夫なのか？」

「はい、屋上は駐車場じゃなくて、ベンチやテーブルがあつて簡単な休憩場所みたいになつてるんですよ。」

屋上の生存者は此方を見つけ両手を振つていた。

「どうする？ スーパーで立てこもるなら入るの手伝つてやるけど？」

「い、いや、やめときます。」

他の2人も首を横に振つた。

「そつか、他に食糧がある場所しらないか？」

「あ、良い場所あるよ。オジサン、道戻つて。」

「オジサンね、お、奴らがこっちにきたぞ。さつさと行くか。」

車は駐車場内で大きく旋回し元来た道に戻つた。

篠崎の案内で着いた家は新築らしい一軒家だった。

3人を先に降ろし門を開け玄関前で待たせた。

厚はトラックを門の前に止め入口を塞ぎ、奴らが侵入しないよう準備した。

少し高い塀をトラックのバンパーに足を掛けて何とか昇りきつた厚は玄関前で3人に合流した。

「「」は？」

「岩崎ん家。私の友達ん家よ。」

「鍵はあるのか？」

篠崎はポスト明け、その天井に張り付いた鍵を見つけた。

「「」にあるのを偶然見ちゃってや。」

「ふーん。で、その岩崎さんは御在宅かな？」

「それは無いです。あいつらは家族全員で体育館に避難してたから

…

「そうか、家に入つたら最初に全員で家の中を見回る。一人で動くと危険だからな。」

「わかりました。」

「はーい。」

頷く加藤。

厚は鍵を開け、ゆっくりと扉を開いた。

整理された玄関。誰もいないのか靴が無かつた。

靴を脱ぎ、直ぐ脇にあつたゴルフバックからそれぞれがクラブを取

つた。

息を殺しながら、1階、2階と全てのドアを開き安全を確認した。建物の中の安全を確認した厚は1階の全ての雨戸、シャッターを下ろした。

室内は暗くなつたが、安全は確保された。

「ふー、これで一安心だな。」

「そうですね。これからどうしますか？」

「ああ、まずは冷蔵庫から適当なもの探して飯にする。あと、風呂を沸かしておいてくれ。みんな入るんだる？」

頷く3人。

それから少し休憩を兼ねた情報収集してから移動する図を伝えた。

食事が終つた。乾?があつたので茹で、他にも残り物と思われるものを出し4人で完食した。

篠崎、後藤が風呂に入り、今は加藤が入つていた。

厚はリビングにあつたパソコンで情報を集めた。

イスラム原理主義の陰謀説や 研究所付近が最初に感染した等、信憑性が欠ける情報しかなかつた。

ただ、どの地域の警察も軍も最初は活動していたが、今は組織としての行動は見られなかつた。

「お風呂あきました。」

厚が振り向くと加藤が牛乳が入ったコップを持つて立つていた。

「ああ、あんがと。後藤君たちは？」

「あの2人なら2階にいましたよ。」

「そつか、パソコン使うなりびつだ。風呂行くよ。」

「はい、じゅつくりどいつだ。」

厚は椅子から勢いよく立ちあがり風呂に向かつた。

厚は鼻歌を歌いながら風呂に向かつた。

風呂から出た厚は後藤と篠崎の様子を見に2階に向かつた。

岩崎夫妻の寝室のダブルベットに眠る2人は眠りながらも涙を流していた。

それを見た厚は一泊する事を考えた。

(まだ中学生なのに家族友人を一気に失ったんだ。すこしふくらむ口でゆづくつするのもいいかもな。)

厚は足音を忍ばせながら階段を下りた。

リビングに着くと加藤がパソコンを使っていた。

「あー、今日は『』で一泊するから。そのつもりで。」

「はい、でも、どうしたんですか?」

「ああ、上の2人が泣きながら寝てたからな。今日くらいはゆづくり寝させてあげようと思つて。」

厚はそう言しながら冷蔵庫の扉を開けて2本の缶ビールを取り出した。

3人掛けのソファーアに座った厚は蓋を開け、ビールを一気に飲み干した。

「ふう、美味しいな。…ん? どうした?」

加藤は厚の行動をじつと眺めていた。

「いえ…、フフフ、なんだか平和だなって。」

「平和ね。平和だったら、俺は君と知り合った事は無かつたと思つた。中学生が26の野郎と知り合つなんて普通ならないからな。」

「そうですね。そう考へると不思議ですね。」

「ああ、俺と君が出会つたのは偶然の偶然だったんだよ。もし俺が君達をたすけなかつたら、もし俺が学校の近くを通らなかつたら、それ以前に俺が実家に帰ろうと思わなかつたら。そう考へると、俺が君たちを助けることが出来たのは偶然じや無く必然だつたんかもしれないな。」

一気にしゃべつた厚は新しいビールの蓋をあけ一口飲んだ。

「私は必然じやなくて運命だつたと思つ。だつて、そのほうが2人の出会いとしたら素敵だと思つ。」

「ハハハ、運命ねー。」

「阿久津さん、女心が分かつてないわね。そんなんじやもてないわよ。」

「ああ、知つてる。俺がもてないのも運命だつたんだね。」

「わつやつて卑屈にならないでください。感謝していますから。」

「はいはい、感謝してるなら晩飯よろしく。」

厚は残りのビールを飲み干した。

「ふああああ、すげえ眠い。」

大きなあぐびをする厚を見ながら加藤は微笑みながら答えた。

「少し眠つたらどうです？　ここのは安全でしょ？　一泊じゃなくて、しばりくは」」こつてもこいんじやないですか？」

「それも考え方のだな。少し眠るから、何かあつたら蹴つてもいいから起してくれよ。」

「わかりました。」

厚はソファに横になると直ぐに寝息が聞こえてきた。

同時刻　岩崎家　2階

「あの阿久津ムカつく。」

「まあ、そういうやうなよ。こずみはよく頑張つてゐるよ。」

「ふん、雄一が我慢してなかつたら、私がぶん殴つたわー。」

「さうだな、あの態度はムカつくな。上から田線で命令して。」

「雄一はどうするの？」のままアイツにつづくべの。」

「それは無いな。これ以上アイツといたり温厚な俺でもぶち切れるよ。」

「だよねー。雄一が切れたらアイツなんてイチロロよ。」

「だから、俺は考えた。アイツと一緒に居たくないから車を奪えばいいと。」

「でも、鍵はどうするの?..」

「ああ、アイツが風呂に入っている時に盗んだ。」

「キヤハハ、雄一頭いいー。これでアイツはゾンビの餌だね。」

「ああ、あとはアイツが居眠りしている隙に車を奪つてな。」

「そうだね、そうなればアイツはK市になんて行けないからね。まあみるつてね。」

「じゃあ、暫くは大人しくしてよ。…アイツら静かだけど何してんだ?」

「さあ、行ってみよ。」

2人がリビングに行くと加藤はキッチンでカレーを作り、厚はソファで寝ていた。

「…ねえ、これってチャンス?」

「だな。」そのまま黙つていこうぜ。」

加藤は2人が来たことに気がつかず、そのままカレーを作り続けた。少し経つと、トラックのエンジン音が聞こえ、すぐに遠ざかって行った。

加藤は慌てて玄関の扉を開くと、そこにあるはずのトラックが消えていた。

加藤は半分開いた門を急いで閉め玄関に戻り、鍵を掛けた。

17：12

リビングに戻った加藤は厚を起こした。

「起きてくださいー大変ですー！」

揺すりながら声をかけたが、起きる気配が無かった。

「ちょっと、大変なんですってーおきてくださいーーー！」

両肩を揺さぶりながら強い口調で言つたが目覚める気配はなかつた。

加藤は仕方なくキッチンでコップに水を汲み、厚の顔に水をかけた。

「うお！なんだ？！あれ、なんだっけ？ああ、君か…誰だっけ？」

飲酒で赤い顔をした厚はアルコール臭い息を吐きながら寝ぼけた頭を起動させた。

「あの2人がトラック乗つて行つちやつたんです！」

「ほー、それは一大変だなー。」

「何で棒読みなんですか！」

「まあ、落ち着け。実はあのトラックな、ガソリンが無いんだ。いつ止まつてもおかしくないぐらいに。俺だつてここまで来るのにヒヤヒヤしてたんだぞ。」

「え？ それつて…」

「うん、自業自得つてやつ。…後藤君と篠崎さんは自分の意思でここから出たんだ。俺が何か言う事はない。せめて何所かで幸せに生きていけるようことが、祈るのが精一杯だな。」

「…そう、ですか。」

「ああ、自分で運命を決めたんだ。その先に苦しみがあつても、誰も助けてくれない。もう、世界は子供に優しくないし、子供だからと言つて甘やかしてもくれない。」

「…」

「ああ、すまんな、説教臭くなつたな。ん?この匂いはカレーかな?」

「あ、はい。口に合つか分かりませんが……」

「はは、久し振りに誰かの手料理を食べるよ。」

加藤はキッチンで皿にご飯とカレーを入れ冷蔵庫にあつた野菜でサラダを作っていた。

「お、おいしそうじゃん。いただきまーす」

加藤も自分用にカレーを持つてきて厚と一緒に食事をした。

17：15

「ひやつはー！アイツからトラック奪つてやつたぜー！」

「雄一凄い！」

「だらう～車の運転なんて簡単だな。で、どこに行へ？」「

「ん～、ううね。アイツがいないならスーパーで立てこもるものアリかな？」

「ううだな、周りのゾンビどもはトラックで轡き殺せばいいんだしな。そうすれば俺達は大歓迎されるだらうな。」

「その通りね、雄一頭いいわね。」

「それじゃ、スーパーまで行くぜ。」

17・54

「はははは！こいつら邪魔ー！さつさとクタバレー！」

「雄一！凄いよー超面白いよー！」

トラックが奴らの中を縦横無尽に駆け回った。

3回目の突入している最中、数体のミニチ状になつた死者の服と肉片が前輪に絡みつきハンドル操作が不能になつた。

「あれ？ハンドルが！動かない？」

「ちょっと、どうしたの？早くあいつら殺してよー！」

「いや、ハンドルが！」

「あー前にシャッターが！キヤーーー！」

トラックはそのままスーパーの正面入り口シャッターに突入しスーパーの中ほどまで進入すると壁に衝突し止まった。

「う…、ゆ、雄一、大丈夫？」

「…」

「雄一？」

後藤は座席とハンドルに挟まり田を開けたまま死んでいた。

「ちよつと雄一！冗談はやめてよ！ねえ、起きてよ…ねえ…」「

篠崎は動かなくなつた後藤の肩を揺らしたが、次第にその力は弱くなつていった。

「…」めんね、雄一、…私行くね…」

篠崎は壁にぶつかつた衝撃で壊れたドアから出ると少し先に奴らが近づいてくるのが見えた。

(1階はダメね。2階なら!)

篠崎は階段に向かつて走った。

しかし、階段には非常用シャッターが下りていた。

「そんな…」

階段は店の奥にあり、エレベーター、エスカレーターは入口の脇にあつた。

そのため、エスカレーターを使うには奴らの中を通るしかなかつた。

篠崎は覚悟を決め奴らの中に走り込んだ。

2階のエスカレーターを昇りきった場所にテーブルや商品棚でバリケードが作られていた。

そのバリケードの後ろには2人の男性生存者が待機していた。

彼らは奴らが侵入してきた時にバリケードを設置していた。

「畜生！あの馬鹿トラック野郎！死にたければ勝手に死ねばいいのに、俺達を巻き込むなよ！」

「ああ、これで1階のフロアには降りれなくなつたな。」

「だが、食料品や保存食は全部2階に運んであるんだ。それに従業員用の通路は鍵とバリケードで奴らが入つて来れないようにしてあるんだ。ここから逃げるならそのルートを使えばいい。」

「その通りだな。お、ここもそろそろヤバいかな？」

止まつたエスカレーターの階段を数体の奴らが昇つてきていた。

「ああ、手筈通りにこいつ。ぜ！」

「おい！そっち側もいくぞ！」

男が下り側のエスカレーターの後ろで待機していた男に合図をした。

それぞれの場所にいた男たちは2階のフロアに向かつて走った。

暫くするとフロアとエスカレーターの間に防火扉とシャッターが降

り道をふさいだ。

それ以降、2階の防火扉が開く事は2度と無かつた。

18・54

「う、うーん。もう食べられないよ。」

ソファに横になつた厚は苦しそうに加藤に訴えた。

「そうですね。3人分食べましたからね。」

「ああ、苦しくても後悔はしないよ。女性の手料理なんて何年ぶりだろう?」

思い浮かぶのは母の顔。だが、加藤はその言葉を母以外の人を作つてもらつたと勘違いして聞いていた。

「そうですか。それはよかつたですね。」

急に不機嫌になつた加藤は自分でも何故機嫌が悪いか分からなかつた。

「それにしてもカレーは美味しかつたな。これなら毎日でも食べたいな。」

「……そ、それは!—いえ、……わ、わたしはもう、寝ます。おやすみ

なさい。」「

顔を赤く染めた加藤は2階に駆け昇った。

「ん？まだ7時だろ？ずいぶん健康的な生活だな。まあ、いいや。俺も寝よう。」「

厚はそのままソファで皿をつづつた。しばらくすると厚から寝息が聞こえてきた。

7：45

朝食を食べ終えた2人はキッチンの棚や冷蔵庫から保存がききそつなものを探していた。

「結構あるな。」「

「ええ、凄い量ですね。」「

缶詰が大小50個以上ペットボトルの水やジュースが10本もあつた。

「これ、どうするんですか？」「

「ああ、この家のガレージに車があるんだ。そこそこ運びます。」「

「え？車があつたんですか？」「

「ああ、リビングに車の鍵があった。それなら車もあるだろ。まあ、ガソリンがなかつたらアウトだけど。」

「良く見てますね。私なんて気がつかなかつたです。」

「まあね、早速だけど荷物を運んじやおうか。」

「はいー。」

車は大型のワンボックスカーだった。厚は鍵を刺しガソリン量をみるとほぼ満タンだった。

(これなら家まで行けそうだ。この車を大事にしないと)

ガレージのシャッターを開けた厚は道路に出て周囲を確認した。

奴らも人も確認できなかつた。

厚は加藤が車の中に入ることを確認すると、運転席に乗り込みエンジンを始動した。

車はゆっくりとガレージを抜け西に向けて走り出した。

「雨、降るかも。」

「はい、向こうは曇つてますね。」

西の空には黒くもが見えた。

「確か、スーパーってこの先だっけ？」

「ええ、そうですよ。」

「ちょっと行ってみようか？もしかしたら後藤君たちが立ち往生してるかもしれないし。」

「…わかりました。」

「ん？後藤君たちと何かあったの？」

「…私、あの人たちに虐められてたんです。先生に相談しても私が悪いみたいな言い方するし、学校は嫌いでした。」

「そうか…」

「でも、今は違います。虐められてたけど、あの時の方が今よりもずっとマシよ…」

「ああ、なんでこんな事になつたんだろうな。」

それつきり会話はなかつた。

厚は車を駐車場に入れると奴らの数が減つていて、事に気が付いた。

「あれ？ずいぶんと数が減つてゐるな。」

「いえ、あれを見てください。正面のシャッターが破られています。  
きっと中にたくさんいるんですよ。」

「なるほど。だが、あのシャッターを奴らが壊したとするど、安全  
な場所なんて無くなるぞ。」

「あーあのタイヤの跡は？」

地面には血まみれのタイヤの走った跡があつた。

「そうか！車で奴らを轢いてたら何かの原因でシャッターに突っ込  
んだんだな。」

「そうみたいですね。乗つてた人は大丈夫でしょうか？」

「わからんが、無事を祈るしかないな。それに……」

「それに？」

「奴らが俺達に気が付いたようだ。さつさと逃げよ！」

厚は車を走らせ駐車所から脱出した。

「これからどうすんですか？」

「ああ、どこか周囲の安全を確認できる場所で休憩して食事かな？  
その後は高速に乗つてＫ市まで直行かな。」

「はい、わかりました。」

「所で君はどうままで付いて来るの？」

「えっ？ 迷惑ですか？」

「いや、どこか目的地があるなら家に寄った後でよければ連れて行くよ。」

「家族も皆死んじゃいましたから……。親戚も遠いですし住所もしりませんから……。」

「さうか、それなら俺がドコか安全な場所までエスコートするかな。」

「H、エスコートですか……、ぜひ、お願ひしますー。」

「そんなに力込めて言われても……まあ、いいや。んじゃ、ゆっくり出来そうな場所探すか。」

「ハイ！』

西に向かうワゴンの先には暗雲が立ち込めていた。

彼らの先にあるのは希望か絶望か？

厚は雪の降る町で悲しき出来事を体験する…

## 第二話 女性の敵 敵は女性

「うへん」

厚はソファの上で気を失っていた。

トランクスを履き、シャツ一枚で横になつて寝ていた。

その上に掛けられた毛布を加奈が直した。

「大丈夫かな？」

加奈が心配そうに厚の顔を覗き込んだ。

B a c k - h o m e o f t h e D e a d

第三話 女性の敵 敵は女性

厚達は国道をゆっくりと西に向けて走つて行つた。

雨の中ワイパーが必死に動き厚の視界を確保していた。

12:11

「やつやつと見てよ。」

「はい、うつですね。そこかに休憩できる場所があればいいんです  
が。」

ゆづくり走る車の前に急に人影が飛び出してきた。

厚は急ブレーキを踏み、奴らだったら少しスピードを上げて引き離  
そうとした。

だが、そこにいたのは高校の制服を着た女子高生だった。

その女子高生は運転席の窓に走って近づき窓を叩いて大声で叫んだ。

「助けてくださいーーー姉が。姉がーーー！」

必死な形相の彼女を厚は窓を少し開けて声をかけた。

「とつあえず、…君は嘔まれているか？」

「え? いえ、嘔まれていませんーーー！」

「おひ、ひどな雨の中では話もできない。とつあえず車に乗って。」

厚は親指で後部座席を刺しすと彼女は頷き後部座席に乗り込んだ。

「済まないが、ロックさせてもう一つ。奴らが来たら危ないからな。  
で、君のお姉さんがどうしたんだ?」

「はい、姉を助けて下さい。私たちがマンションに立てこもつているとベランダを超えて男の人人が入ってきたんです。」

「その男は奴らか？」

「奴ら？」

「ああ、生き返った奴らって意味。」

「それなら違います。3人の男は見た目が日本人なんですが、外国語をしゃべつてました。」

「そうか、とりあえずマンションに案内してくれ。」

「そういえば自己紹介してなかつたな。俺は阿久津厚。」

「加藤智子よ。」

「私は内田加奈 うちだかな。あ、そこの角右です。」

暫くはしると大きなマンションが見えた。8階建ての少し古いマンション。

「どの部屋？」

「はい、211です！」

「了解！スピードを上げるぞ。」

厚は雨音でエンジンの音が消えている事を利用してスピードを上げ

た。

マンションの入口は2か所あつたが、両方とも強固なバリケードで侵入はできそうもなかつた。

そのバリケードの前には数体の奴らが彷徨つていた。

裏手のベランダ側に行くとダンプカーが止まつていた。

そのダンプの荷台から運転席の屋根に上ると2階のベランダに登れそうだつた。

「どの部屋？」

「赤いカーテンの部屋です。」

ダンプで昇つた先の隣の部屋に赤いカーテンが見えた。

「わかつた。あそこだな。」

厚はダンプから少し離れた周囲に何もない場所に車を止めた。

「俺が助けにいくから2人とも待つて。」

「え、でも…」

加奈がうろたえたが厚はニカツと笑い手に持つた武器を見せた。

「大丈夫、俺にはこれがあるから。」

厚が見せたのはゴルフクラブだった。

「気をつけてね。あなたが死んだら私も死んじゃうから。」

加藤の意味深な発言を厚は軽く返した。

「ああ、大丈夫だよ。俺はまだ死ねないから。んじゃあ、行つて来るよ。」

厚は素早く車を降りダンプの荷台に駆けのぼった。そのまま運転席の屋根に昇りベランダまで軽々と昇つた。

ベランダの柵を乗り越えた厚の目の前に割れたガラスとその向こうで、うつ伏せに倒れている男性を発見した。

室内は争つたのか、かなり荒れたいた。

タンスは半開き、棚の中身が散乱している状態だった。

厚は土足のまま倒れている男に近づいた。

(生き返つたら…)

ゴルフクラブで何度も押して様子を見るが完全に死んでいるようでは反応はなかった。

厚は足を使い男を仰向けにすると、男は苦悶の表情で死んでいた。

(これは…、奴らの仕業じゃないな)

男の首には大きく刃物で作られた切り傷があつた。

胸にも刺されたのか何か所も細長い穴が開いていた。

「キヤ！」

叫び声と共に隣の部屋からガシャンと大きな音が聞こえた。

（クツ！マズイな！）

厚はテーブルの上にあつたガラス製の大きな灰皿をつかむとベランダに向つて走った。

12:44

「a o d f z p w g k l m！」

「p o s f .j e f .j !」

「オトナシクスル。スグニオワル。」

2人は日本語以外の言葉でしゃべり、1人は日本の言葉だが、外国人が話すようなカタコトの言葉だった。

2人は女性の腕を1本ずつ背後から掴み動けないようにし、最後の1人が女性の服を破いた。

「キヤー！」

身の危険を感じた女性は思わず叫んでしまった。

強引に胸を触られ、性器も乱暴に触られ痛みを我慢するように歯を食いしばった。

後ろの男たちが女性の体を床に仰向けのように固定すると下半身を触っていた男が自分の性器を取り出し女性の性器に近付けた。

その瞬間、性器を出していた男が左に吹き飛んだ。

厚

間一髪だった。

女性をレイプしようとしている男の背後から近づき左手で持った灰皿で側頭部を殴った。

男は倒れ、唖然としている男にゴルフクラブで頭上から振り下ろし、もう一人は灰皿で鼻の辺りを狙つて殴った。

3人は倒れ、厚は女性に手を差し伸べた。

「大丈夫か？着替えがあるなら着替えて。その間に、こいつらを縛つておく。」

「…」

女性は放心状態だが、ゆつくつと頷くと隣の部屋へと向かつた。

「さて、どうするかな？」

厚は3人をうつ伏せにし紐を使い手を後ろで拘束し、足も歩けない様に紐で縛った。

その内の1人の腰には大きな鉈が鞘に入つた状態で装着されていた。

万が一を考え、鉈を男から外し壁に立て掛けた。

一息ついた厚は部屋を見回した。部屋の隅に大きなカバンが3つ置かれていた。

部屋の雰囲気は小物や女性らしい物で統一されたいたが、その鞄は黒く無骨なデザインだった。

気になつた厚は鞄を開けると中から指輪やネックレス等貴金属類や土地の権利書も入つていた。

（火事場泥棒か）

厚は死んでいた隣の住人を思い出した。

刃物で首を切られた男性。

（こいつらが、殺したのか？）

厚は男たちの目が覚めるように体を揺すつて起こしたが、気が付いたのは鼻を強打した男だけだった。

「おい、日本語わかるか？お前らが隣の人を殺したのか？」

「ウルサイ、クソジャッブナンテ死ンダホウガイ。コレデ俺タチハ国ニ帰レバ英雄ニナレル。」

「んで、あの指輪や土地の権利将は盗んだのか？」

「違ウ、ヒロッタンダ！ダカラ、俺達ノ物ダ！」

「そうか、わかった。後で、解放しよう。」

「解放するんですか！」

振り向くと先ほどの女性が立っていた。

「ああ、俺はこいつらに復讐なんてしないし、殺しもしない。」

「でも！」

「とりあえず、気を失っている2人を解放しよう。」

厚は1人を抱えあげ玄関から外にでた。直ぐに部屋に戻りもう1人を抱えて外に出た。

もう一度部屋に戻ると、拘束されている男はニヤリと笑った。

「ハハハ、ジャップガ俺達　人ヨリモ優レテイルハズガナイ！サ

ア、紐ヲ解クンダ！」

拘束されながらも笑う男を厚はつんざりした表情で言った。

「つるさいな、何か勘違いしてないか？君たちを本当の意味で解放するには俺じゃない。」

「ン？ ドウイウ…モガ！」

厚は男の口元をタオルで縛ると会話が出来ない状態にして、担ぎあげた。

その間も女性は厚を睨んでいた。

「はあ、君も彼が解放されるのを見にくるんだ。」

「…」

女性の目は厳しさを増したが、厚の後ろに着いて玄関を出た。

玄関の前には厚と担ぎあげられている男以外居なかつた。

「それじゃあ、解放しようが！」

厚は男を玄関前の柵から1階に落とした。

その下には数体の奴らが蠢いていた。

「ン　　！ツング！」

アスファルトの地面に落下した男は痛みから声を上げた。その声に反応した奴らが拘束された男に襲いかかった。

「ング！ンガ！アアアアアアアア－－！」

男は生きたまま食われた。その様子を女性が真剣な眼差しで見つめていた。

「で、どう思ひ？」

「どうって……、無理にやられずに済んだけど、やっぱり殺したいって思ったわ。でも実際に殺されるのを見ると……」

「良心が痛むのか？アイツらは最低でも1人以上の無関係な人を殺してるんだ。それも私利私欲でな。」

「……」

「殺されて当然とは言えないが、殺される覚悟がない者は殺しをしてはならないって言うだろ？」

「……あなたはどうなの？」

「俺か？死にたくないから俺を殺そうとする者を殺す。それが世界のルールになつたんだ。もう数えきれない数の蘇つた奴らを殺してる。まあ、生きた人は初めてだけだな。」

「……どうしてって言われてもな。ここに来る途中で助けた女の子がい

「どうしてって言われてもな。ここに来る途中で助けた女の子がい

るんだけど、その子がどこか安全な場所に避難するまで俺は死ねないんだ。だから、絶対に生き残る。」

「… そう、なの…」

「ああ、そろそろ部屋に戻らひつ。これからのお話を話したい。」

厚は玄関から部屋に戻った。

女性も厚の後に続いた。

13：32

女性の部屋には厚、加藤、加奈とその姉がテーブルを囲っていた。

「助けてもらつたのに自己紹介もしないのは変ね。私は内田美香。加奈の姉よ。」

内田美香 うちだみか は20代前半の髪の毛が少し茶色いメガネを掛けた女性で、

その妹の加奈はショートカットの活潑的な少女だった。

「俺は阿久津厚。K市に向かってるんだ。」

「私は加藤智子。目的地は無いわ。とりあえず、阿久津さんと一緒に居る方が生存率が高そだから着いて行つてるわ。」

「そつか。」

美香の言葉の後は暫く沈黙が続いた。

「あ、そういうえば飯まだだつたな。加藤さん、お腹すいただろ?」

「そういうえはそうですね。」

「それなら、私が作ります。姉を助けてくれたんだから少しでも恩返しがしたいですか。」

加奈は立ち上るとキッチンに向かつた。加奈の後を、美香が、料理出来ないのにしようがないわね、と呟きながら続いた。

15：16

食事を終えた一同は部屋に入るのに雨の中、ダンプを上つた為に服が濡れていた。

そこで美香の勧めで風呂に入った。着替えは美香の服を借り加藤、加奈、美香と入った。

加藤は黒のジャージを着て、加奈は赤いジャージ。

美香は短パンに大きめのシャツを着ていた。

美香が前かがみになると桜色のロマン印が見えそうだった。

風呂上りの女の匂い、美香の無防備な格好で厚の理性は振り切れる寸前だった。

(煩惱退散、煩惱退散)

顔を赤くしながらリビングを出て風呂に向かつて、脱衣所で物体Xが籠の中で鎮座していた。

青い1組の下着。

厚はこれを手に取つて誰の物か確かめるべきか、悩んだ。

悩んだ

悩んだ

悩んだ

悩んだ

⋮

厚の中の天使と悪魔の葛藤は天使の勝利で終わつた。

厚は籠を脱衣所から廊下に出し、服を脱いで浴室に入った。

(つべーじーでもかーー！)

浴室には女の匂いが充满していた。

厚のモノは自然と膨張していた。

シャワーから冷水を出し頭から掛けると、昔見たゲイの動画を思い出した。

ムキムキの男性が、腹の出た中年男性との情事。

頭の中で再生された映像は一瞬で厚の膨張率をマイナスまで引き下げた。

シャワーを止め、心の芯まで冷えた体を湯船に入れ温めた。

「あの、お背中ながしましようか？」

脱衣所から聞こえたのは加藤の声だった。

「いや、大丈夫だから。気にしないで。」

「でも、私は助けられてばかりで何も恩返ししてないじゃないですか。せめて、私が出来る事つていつたら背中を流すくらいしか無いかなって…」

「あのね、俺は26歳なんだよ。中学生と裸の付き合いしたら淫行罪で捕まっちゃうよ。」

「いまは警察は機能していないんじょ？大丈夫です。」

「俺が大丈夫じゃないから！それに、あの2人も居るしダメだつて！」

「あの2人に相談した結果が、こうなったんです。応援してくれました。」

その声は脱衣所からのでは無く、はつきりと聞こえた。

その姿は、体にタオルを巻いた姿だった。少しタオルが短いのか危険ゾーンが見えそうだった。

髪の毛は纏めて縛つていて普段は目立たない胸が強調されていた。

「ちょ！ 入っちゃダメだつて！」

厚はとっさに頭の上のタオルを湯船に入れ股間を隠した。

「私も中に入りますね。」

加藤は湯船に入ると厚に背を向け寄りかかった。

加藤は自分のお尻にタオル越しだが固いものが触れる感触があった。

厚の手を強引に加藤の胸に触らせた。

「あの…、初めてなんで優しくしてくださいね…」

加藤は真っ赤に染まつた顔で厚を見た。

「……キヤ　　！！！」

厚は興奮か湯当たりか鼻血を出しながら氣を失っていた。

「うへん」

厚はソファの上で氣を失っていた。

トランクスを履き、シャツ一枚で横になつて寝ていた。

その上に掛けられた毛布を加奈が直した。

「大丈夫かな？」

加奈が心配そうに厚の顔を覗き込んだ。

「大丈夫よ。そのうち氣が付くわ。それにしても、凄かつたわね。」

美香が厚の大きくなつたモノを見た感想を言った。

「そんなに大きいんですか？」

テーブルを挟んだ反対側にいる加藤は少し顔を赤くしながら言った。

「ええ、私だつてそれなりに経験あるけど、あんなに大きいの見たことないわよ。」

「普通の人つてどんなの？」

加奈は高校生だが未経験だったので、3人の中で唯一の経験者の美香から情報を聞き出そうとしていた。

「さうね、…電話の子機ってイメージできる? あれが標準かな?」

「でも、厚さんはペットボトルくらいありましたよ?」

「さうね、長さも太さもそれくらいね。普通じゃないわ。」

「それってやっぱり苦しいの?」

「うーん、聞いた話になるけど、あのサイズの慣れたら後戻り出来ないらしいわよ。物足りなくなるって。」

「んー? 何が物足りないんだ?」

気が付いた厚が話に加わった。

「…物資よ! 物資! ほら、私たちは一緒にに行くなら食糧とか足りなくなるかなって話よね? そうだよね智ひちゃん?」

「や、さうです、食料の話ですよ、別にいかがわしい話なんてしてませんよ?」

「ん、そつか。君たちも一緒にいくなら食事の事考えないとな。君たちほどいか目的地はあるの?」

「さうね、実家が市にあるの。そこまで連れて行って言つてもいいえるかしら?」

「了解。U市ね。」

U市はK市の隣で高速の降り口がK市の一つ手前にあり、実家に戻る途中にあるので問題ないと厚は思った。

「もうすぐ6時か。夜の移動は避けたいな。」

厚は夜の移動は危険だと考えていた。

暗闇の中では奴らへの対応が遅れると命取りになるし夜中の運転は疲れが溜まるのが早く厚は嫌っていた。

「日が伸びて来てても、朝まで運転するなんなんて勘弁して欲しいし、もうすぐ高速に乗れるだろ？すぐに目的地に行けるぞ。」

「あ、私も免許持ってるわ。」

美香が免許証を厚に見せた。

「そうか。それは良かった。それなら、俺がダンプを運転して高速道路上で道を塞いでいる車を体当たりで退かすから、美香さんはトンボックスで後ろから付いてきてほしい。」

「いいけど、ダンプなんて運転できるの？」

「大型の免許は無いけど、マーカークアルの免許持つてるから何とかなるでしょ。ダンプにガソリンがある前提の話だけどね。」

「わかったわ。食料はどうなってるの？」

「缶詰とペットボトルで4人で、3、4日分かな？高速に乗れば大丈夫だと思うけど。」

「途中のサービスエリアやパークリングで補給が出来れば良いけどね。」

厚と美香が今後の事を話していると不機嫌な顔をした加藤が厚の視界に入った。

「ん？どうした？お腹痛いのか？」

厚が心配して声をかけるが加藤はムッとした表情で答えた。

「何でもありません！大丈夫です！」

加藤からしてみれば、告白以上の恥ずかしい事をしていながら厚の態度は何にも変わらない、もう少し自分を意識してほしいと加藤は心の中で愚痴つた。

「女の子は複雑なんですよ。」

加奈が加藤のフォローに回った。

「そうか、女の子は複雑なのか…」

厚の脳内では女の心理は想像できるはずもなかつた。

「それじゃあ、明日は朝早くから行動するんでしょう？だったら今日は早く寝ないとね。」

「姉さん、晩御飯食べてないとお腹すくよ?」

「そうね、簡単なものでいいでしょ?すぐに作るわ。」

美香が席を立ちキッチンに向かった。

「私もお手伝いします。」

加藤も手伝う意思を示しながら後を追った。

「私はお布団の準備してきますね。」

加奈が寝室に向かった。残されたのは厚一人だけだった。

(俺はなにしようか?)

厚は窓際に移動すると街頭が点在する道路と明かりの灯されていい民家が見えた。

(この町は全滅したのかな?それとも避難でどこかにいるのか?)

厚の疑問に答える人はいなかつた。

食事をしている最中にワインを持ってきた美香が飲み始め、厚もワインを飲み始めた。

ワイン一本では物足りず、2本3本と空けていった。

いつの間にか、加藤と加奈も飲んでいて収集のつかない事態に発展した。

「うへん、暑い。なんでこんなに暑いの？」

加奈がそつこいながらジャージの上下を脱いだ。

「私も脱ぐー。」

加藤もジャージを脱ぎ下着姿になつた。

厚はすでに酔いつぶれていて部屋の端で仰向けて寝ていた。

美香はシャツと短パンを脱いでショーツ一枚で飲んでいた。

「ねえ、あれって暑苦しくない？」

美香が指さしたのは寝ている厚だった。

「うん、あれは無いね。」

「剥いちやいましょ。」

加奈と加藤も同意し厚の服を脱がせにかかりた。

シャツを脱がし、ズボンを脱がす。

「パンツはどこにある？」

美香が、加奈と加藤に聞いた。

「それは、もちえりん」

「剥いちゃいましょ！」

加奈はトランクスを手に駆け一気に引き抜いた。

ベチンと音がして厚のモノが腹に当たったあと天を仰いだ。

都合によりダイジョスト&音声会話のみでお送りします

うわ、大きい。変なにおいする

ほら、見てて。触ると動くのよ

あ、ほんとです。触るとビクつとします。それに硬いです

これをいづして動かすと気持ちいいのよ

うわ、ビクビクしてる

それに口や胸であるのも気持ちがいいらしいわ

口は聞いたことがあるけど、胸って？

胸せ、いつかるのよ

うわ、かーーい

ヒロヒロですね

胸でせりながら口でも出来るのみ

ははは、阿久津さん寝てゐるに腰が動いてる

それは気持ちがいいからよ、

姉さん、私にもせいせてよ

いいわよ

うさじょ、うさじょ

ふふ、智ちやん、じゅの初めてみたでしょ？興奮してゐ？

興奮ですか？

ほひ、智ちやんも自分のを触つてじゅ

え、じゅですか？

違つわ、じゅよ

う…ん、あ、はあはあは、ああ、気持ちこいです

もつ、濡れ濡れね

あ、あ、あ  
！…………はあはあはあ

智ひりちゃん、寝ちゃったんだね、あ、加奈ー！寝るならそれ離しなさい

んへ、眠いー

まったく、こんなに大きなものを独り占めするなんて、

：

加奈も、智ひりちゃんも寝ちゃったわね、じゃあ、いただきます

8・22

「うへん、何時だ？」

厚は眼が覚めると時間を確かめた。外はまだ雨が降っていた。

「あ、おせよひ、早く起きなさい。」「

「おせよひ……？美香わざ、なぜ田舎を逸り出す？」

美香は厚の顔を直視出来なかつた。

「なんでもないわ、わざと準備しなさい。荷物は積み終わつてゐし、他の2人は車の中にいるわ。」

部屋の中には厚と美香しかいなかつた。美香はベランダから降りようとしていた。

厚は大きく伸びをすると銃入つた鞄を掴んでベランダからダンプの荷台に飛び降りた。

ダンプの運転席に乗り込むと刺さつていた鍵を回しエンジンを回転させた。

(ガソリンは十分、高速の入り口まであと少しだな)

厚がアクセルを踏み込むとゆっくりとダンプが動き出した。

彼らの先にあるのは希望か絶望か？

厚はついに高速道路の入り口を直撃する

## 第四話 それぞれの思いと生存競争

厚の足が何者かに掴まれた。

その掴んだ者は食事にされていた老婆だった。

「ちょ、まてよ！」

厚は老女の腕を振りほどき金属バットで老女の頭をたたき潰した。

脳髄が飛び活動を停止した。

Back - home of the Dead

第四話 それぞれの思いと生存競争

11:33

厚の乗ったダンプカーは追従するワンボックスカーを護るように雨の降る国道を進んで行つた。

(お、高速入口の看板が見えてきた。もうすぐだな)

厚は看板を見て少し喜んだ。

通常ならここまで1時間の道のりを数日かけて来たので、心の中でやつとここまで着いたと溜息をこぼした。

高速の入口は2レーンあったが、1レーンには車が横倒しの形で塞いでいた。

もう一つのレーンも1台の赤い車が運転席のドアを開けた状態で放置してあつた。

厚は周囲を警戒しながらダンプを降り、赤い車を調べた。

「うつー…」これは…

無人だと思った車には奴らの食い残しが放置されていた。

厚は車のギアを二コートラルにし、ハンドブレーキを解除するとダンプに戻った。

ダンプで赤い車の後ろをゆっくり押し、進路を確保した。

厚達は休憩と食料の確保の為にパーキングに止まつた。

後方の美香が運転するワンボックスカーはパーキングの入口で止まつていた。

小さなパーキングエリアで10台のトラックと5台の乗用車が止まっていた。

厚はダンプのクラクションを鳴らし建物から奴らを誘い、ダンプで轢き殺そうと考えた。

ブ　　、ブ

2度の大きな音でパーキングエリアの建物とトイレから20人ほどの奴らがノロノロと歩いてきた。

厚はさらに2回鳴らし奴らの注意を完全にダンプに引き付けた。

ダンプの周囲に群がつて来た奴らを厚はダンプで当たり倒し、その上を車輪でゆっくり踏みつぶした。

十数回、同じことを繰り返した厚は完全に奴らを倒したと確認するためにゴルフクラブを持ちダンプを降りて確認した。

ミンチ状になり悪臭を漂わせている物体は動く事はなかった。

厚は止まっている車を1台ずつ確認して中に奴らがない事を確かめた。

次に売店の建物のあるトイレに向かった。

男子トイレには異常も奴らもいなかつた。

女子トイレに入るとすぐに奴らの食べ残しがあつた。

閉まっているドアを一つ一つ開けて行くと一つだけ開かないドアがあつた。

ドア越しにそつと耳を近付けると中から女性の声だが低い唸り声が聞こえた。

厚は仕方なく隣のドアから便器に足を掛け仕切りをよじ登ると首を赤く染めた中年女性がユラユラと立っていた。

厚は「ゴルフクラブで女性の頭部を強打すると女性は壁に寄り掛かるよに倒れ、動かなくなつた。

「ゴルフクラブが曲がつてしまい折れそうになつたので、厚は先を折つて頭部を刺殺できるような鋭利な棒にした。

トイレの安全を確保して外に出ると雨が上がつていた。

そして、駐車場には先ほどまで無かつた車が1台あつた。

車の事が詳しくない厚の印象では、頭の良くない連中が好みそうな車であつた。

「いやー…やめてー！」

「はなしてー！」

「へへへ、大人しくしてな。すぐに気持ち良くなれるぜ。」

美香と加奈、加藤が3人の男に連れられて売店に入つていいくところ

が見えた。

( おいおい、勘弁してくれよ！ 2日連続かよ！ )

厚は叫びたい気持ちを押さえて売店に背を屈めて向かつた。

売店の入口から覗くと3人の女は3人の男に部屋の角に追いつめられていた。

厚が助けるタイミングを伺つていると、4人目の男が現れた。

口をだらしなく開け片腕が無い男。奴らだった。

その男に気がつかない3人は女たちとの距離を縮めるが、あと数歩の所で1人が噛みつかれた。

噛みつかれた男が叫びながら倒れると噛まれなかつた2人が奴らを金属バットで殴殺した。

まだ、自意識があつた噛まれた男も2人の男に殴殺された。

友人の死体を見る2人は明らかに動搖していた。

これをチャンスと見た厚は身を屈めながら静かに売店に入ると折れたゴルフクラブを男に向かつて投げた。

ゴルフクラブは男の首に刺さり倒れた。もう1人が厚の存在を確認すると金属バットを持って襲いかかってきた。

売店の狭い通路では金属バットは上からの打ち下ろしか出来なか

つたが、厚には十分恐怖を感じる攻撃だった。

何度かの攻撃を後ろに下がりながら避ける。厚は避けながらもお菓子やせんべいの袋を落としながら後退していた。

男がお菓子の袋を踏み前かがみに倒れかけ、両手を地面に付けこらえた。

が、厚は男の首元に鉈を振り下ろし男を殺した。首は切断までにいかずに少しだけ付いた状態で絶命した。

厚は周囲を警戒し、他の敵はいないか売店内を確認した。死んだ3人の男と、1人の奴ら。

売店の中には3人の女性と厚しかいなかつた。

厚と女性は店内の籠に詰めるだけのお菓子や飲み物を入れワンボックスに詰め込んだ。

その間に、女性と厚の会話は無かつた。

女性は厚の助けに胸を打たれ、厚は直接の殺人で女性に氣を使う余裕はなかつた。

厚は無言でダンプに乗り込むとエンジンを掛け、パーキングを出で高速を進んだ。

ワンボックスの中では美香が運転し、助手席には加奈、後部座席に加藤が座っていた。

それぞれが飲み物と食べ物を食べながらの移動だったが、美香が不意に口を開いた。

「ねえ、阿久津さんってなにも食べてないわね。大丈夫かしら。」

「そうね、私たちの方にしか水も食料もないわね。」

「阿久津さんも大人なんだからお腹がすいたら、きっと何かサインしますよ。」

「そうね、…私たちを助けてくれたとき、格好良かつたわね。」

「うん、素敵だつたわ。」

「はい、私を助けてくれる王子様ですね。」

「ともちゃん、『私』じゃなくて、『私たち』でしょ。」

「はい、そうでしたね。私たち全員で幸せになりますね。」

「そりよ、ともちゃん。加奈もわかってると思うけど、抜け掛け禁止よ。今の世の中では彼以上の誠実さを持つ人はいないわ。」

「ええ、分つてるわ姉さん。姉さんを助けてくれる時に私に大丈夫だつて微笑んだ笑顔は忘れませんよ。」

「美香さんも加奈さんも判つてないわ。阿久津さんは誠実だけじゃなくて、私たちの為に自ら危険な事をして助けてくれたやさしい心をもっているのよ。」これが一番大事よ。」

「そうね、私は彼の誠実さに、美香は笑顔に、ともちやんは優しさに惚れたのよね。3人で彼のお嫁さんになれば、皆幸せになるわね。」

「でも、阿久津さんはどう思つているんでしょうか? 私達が一方的に好きだと言つても…」

「大丈夫よ、姉さんの色氣、ともちやんの可愛さ、私の元気が一つになれば落とせない男はいないわ。」

「そつよともちやん、考えてみて。女の子3人に好かれて、その女の子達の中なら浮氣のサインが出てるのよ。男だつたら嬉しくて涙がでるわよ。」

「そりですか。まあ、話は変わりますけど、美香さん。」

「ん? 何?」

「昨日の夜、ヤリましたね?」

「…ナンノコトカナ?」

「私、途中で起きたんです。そしたら、阿久津さんの上で乱れる美香さんが見えたんです。」

「姉さん! 同盟の事、早速裏切ったわね!」

「違うわ、裏切つてないわよ。同盟は今日の朝に結んだの。確かに私はヤツたけど、それは同盟を結ぶ前の出来事よ。」

「うーん、確かにそうですね。ただ、私たちは納得できませんので、次のそういう機会があつた時は私たちを優先でやらせてください。」

「そうよ、姉さん。不公平よ。」

「そうね。それで2人が納得するなら、そうしましょう。でも、初めてでしょ？意地の張り合いで初めてを失つてもいいの？」

「いいんです。阿久津さんなら構いません。私を助けてくれたんですから、初めてを捧げたいです。」

「うん、ともちゃんの言つ通りだわ。私も初めてだけど、阿久津さんなら優しくしてくれそうだし。」

「まあ、2人がそれでいいなら私はかまわないけどね。」

3人のうち加藤のみが告白のよつな事をしていたが、厚はそれを聞き逃していたことであった。

未だ誰一人として、その想いを彼に伝えていなかつた。

厚達はS市への降り口直前にあるサービスエリアに来ていた。

ダンプで動かない車を押しこみながら高速道路を移動したので時間がかかつてしまつた。

「ここでは奴らが他のグループによつて掃討されたようで動くものも無かつた。

もちろん、食料も無く厚達は空になつた棚を見るだけであった。

「ここには何にもないな。」

「さうね、自動販売機のジュースまで持つて行くとは驚いたわね。」

壊された自動販売機を見て美香が呟いた。

「姉さん、何もないの？」

「ええ、缶のお汁粉も売り切れね。」

「そり、それならサッサと行きましょ。」

「ああ、そうだな。…あれ？ 加藤さんは？」

「あれ？ いないわね。」

「あ、あそこに行こうわ。」

美香が指した先にはサービスエリアの厨房から出でてくる加藤が見えた。

その手には焼きそばがパックに山のよつに入つていた。

「阿久津さん、お皿まだですかね。これ作ったんで食べて下さい。」

「お、ありがとうございます。運転しながら食べるよ。」

「そ、それなら、私が食べさせてあげます！」

加奈が少し大きな声を張り上げた。

「いや、大丈夫だよ。それにそんなに大声をあげたら奴らが来ちゃうよ。」

「ええ、来たわよ。」

美香が見ている方向を見ると2人の奴らが高速道路上から近づいていた。

「せつせと行くわよ。」

「ああ、だが市に降りたりひとつある？」

「加奈をそつちに乗せるから案内をせて。それじゃあ行くわね。」

美香はワンボックスに向かつて走り出した。

加藤はすでにワンボックスに乗り込んでいる。

加奈もダンプの助手席に座つて発進待っていた。

「はあ、行くしかないか」

溜息をつきながら厚はダンプに向かつた。

「はい、アーネン。」

厚は正面を見ながら口を開くと加奈が焼きそばを口に入れた。

ゆっくりと食べながら、厚はチラリと加奈を見るとうれしそうに微笑んでいた。

運転しながらの食事は集中力を欠くものがあったが、無事にS市の降り口に辿り着いた。

加奈の案内で田圃の中にある道を進んでいった。

「あ、あの人…」

「知りあい？」

「うん、学校に行く途中に毎日犬の散歩してる人…」

少し先に小柄な1人の奴らが見えた。

男は70歳近い老人で、腕には犬のリードを着けていた。

その先には首と胸しかない柴犬が轡き吊られていた。

「どうする。乐にしてやるか？」

「…いん、お願いします。」

「わかった。」

厚はスピードを少し早めて、男と車が衝突した。

男は3メートルほど飛び、地面に叩きつけられた。

その上を厚が右の車輪で踏み潰した。

14:43

厚達の運転する車は1件の農家に辿り着いた。

母屋は一階建て、納屋にはトラクターが見えた。

家屋の周りに塀は無く、手入れされた樹木が田舎しの役割をしていた。

「いーです。私の家にきました。」

加奈が慌てて降りようとしたが、厚が加奈の腕を引き止めた。

「待った。こんな事態になつてから、両親と連絡取れたか？」

加奈はゆつくり首を横に振った。

「それなら、最悪の事を考えるんだ。」

「最悪の事、…わかりました。」

加奈は覚悟を決めダンプを降りた。

加奈が少し駆け足で敷地内に入ると直ぐに立ち止まつた。

厚が心配して駆け寄ると、玄関前の駐車場に2体分の奴らの食べ残しがあつた。

「両親か？」

「…うん、ぐすり…」

加奈は声を押し殺して泣いていた。

「加奈…」

美香が涙を流しながら立っていた。

「やつぱり…だけど、奴らにならないで良かつた…」

美香は蘇つた両親に止めを刺す覚悟までしていた。

「御両親をこんな所に置いてちゃいけない。お墓を作りひつ。」

厚は納屋からスコップを持ち出し、駐車場の隅の田の当たる場所を

掘り出した。

16・29

「車の移動終わった。」

キッチンで料理している美香と加藤に厚が告げた。

「はい、今は加奈さんがお風呂に入っています。私たちは終わりましたんで次、どうぞ。」

「ああ、ありがとうございます。出来た料理を2階に運んおくよ。」

「うん、お願ひね。」

厚の考えでは、奴らに囲まれた状態で1階を移動するには危険と考え、2階の屋根のすぐ下ダンプを移動した。

その隣にワンボックスカーを置き、いつでも逃げられる準備をしていた。

この家の周囲に塀は無くバリケード代わりになるものも無い。

1階の戸口を閉め2階の階段の上下にバリケードを設置し安全を確保しようと考えていた。

入浴を終え食事と睡眠を2階で取る計画を厚が提案した。

3人もその案に従い準備をした。

「お風呂あきました。」

料理を2階に運ぼうとしていた所に加奈が入浴を終え現れた。

「ありがとうございました。加奈さん、料理を2階にお願いしていいかな?」

「あ、はい。わかりました。」

「んじや、風呂に入つてくるね。」

厚は風呂場に向かった。

その姿を加奈がニヤリと笑いながら見送った。

厚が着替えの入ったバックを持って脱衣所に入つた。

バックを開け、着替えを確認するが…

「あれ? 着替えがないぞ? ん? どうなつてるんだ?」

その時、不意にドアが開いた。

そこには加藤が立っていた。

「阿久津さん、着替えですけど汚れていたので洗濯中です。お風呂に入ってる間に洗濯が終わりますので隣に干しておきます。」

加藤はさつ言つとドアを閉めてキッキンに小走りに向かつてしまつた。

「どうするか… 風呂に入らないなんてのは無いし、だからと風呂の着替えは無いし…」

ドアがノックされ、開かれた。

「智ちやんが、阿久津さんの着替えまで洗濯しちゃつたって言つてたけど、どうするの？」

「ん~、どうすつかな。」

「じゃあ、バスタオルでも腰に巻いてればいいじゃない。女じやあるまいし、そこまで恥ずかしいがる必要無いこと思つけど?」

「そもそもだな。洗濯して干してくれないと言つてたし、バスタオルでいいか。」

「それじゃ、いじゆつくつ。」

美香が手を振りながらドアを閉めた。

「やーて、風呂だ。」

厚は全裸になり浴室の奥んで向かつた。

同時刻

どうでした？

大丈夫よ、彼は疑問にも思ってなかつたわ。

それで？

バスタオルを腰に巻いて来るつて。

ふふふ、加奈さんの言つ通りに着替えを洗つて正解でしたね  
でしょ？

加奈は昔から自分の思つよつと人を動かすのが得意ね。

姉さん、その言い方だと私が黒幕に聞こえるじゃない。

え？違うんですか？

ともちやんも、加奈も落ち着きなさい。誰が黒幕とかじやなくて、皆で幸せになればいいのよ。

そうですね。

そうね、姉さんの言つ通りだわ。

私たちは3人で彼を共有するのが目標よ。誰が黒幕とかじやなくて、みんなで相談してきめるのよ?

そうね、私たちの幸せの為に：

あ、これって？

うん、お爺ちゃんが送ってくれたマムシ酒ね。  
たしか、滋養強壮に良いって言ってた気が…

はい、今夜はこれで乾杯ですね。

ともちやん、未成年でしょ？

体は子供でも心は大人です。大丈夫です、がんばります。

まあ、ほびほびにね。姉さんもいるから大丈夫かな？

厚は入浴を終えるとキッチンに向かった。

しかし、そこには誰も居なかつた。

2階に上がる階段の手前には和箪笥が設置してあり、上の方は人が寝ころんで通れるくらいの隙間があつた。

厚はそれをよじ登つて階段に降りた。階段を上りきつた所にも背の高い和箪笥があり、人が1人通れる隙間を残して置いてあつた。

厚が体を横にして滑り込むよつに通ると、すぐ脇の和室に入つた。そこには3人の女性が厚を待つていた。

「あ、阿久津さん最後だから箪笥を動かしておいてね。」

「了解。」

厚は階段前の和ダンスを押して階段から登れないよつに設置した。

部屋に戻ると厚は座布団の上に座つた。正面に加藤、左右に加奈と美香が座つていた。

夕食の途中、美香だけがお茶ではなく透明の液体を飲んでいる事に厚が気が付いた。

「美香さん、何飲んでるの？それってお茶じゃないでしょ？」

「ん、なんだらうね。飲んでみる？」

美香が厚に向かって飲みかけのコップを差し出した。

厚はコップを受け取り一気に液体を飲み込んだ。

「ん、旨いなあ。少し辛めだけど、複雑な味がして結構イケる。」

「飲む？まだいっぱいあるわよ。」

「本当に？」じゃあ、もう一杯貰おうかな。」

厚が美香に向かってコップを出すと、美香が瓶に入った酒を注いだ。

厚が注がれた酒を飲み干すと美香が笑顔で言った。

「阿久津さん、良い飲みっぷりね。さあ、まだまだあるわよ。」

19:22

「阿久津さん？大丈夫？」

「むはははは、まだまだ大丈夫。」

厚は赤い顔をしながら加奈の問いに答えた。

美香は酔いつぶれて下着の状態で座布団を枕に眠っていた。

加奈はショーツ一枚の状態で胸を隠すことさえしていなかった。

加藤は美香がいた席に移動して、全裸で座布団の上に座つていた。

厚はバスタオルを股間に掛けているだけで後ろから見ると尻が見え

ている状態で座っていた。

この場にいる全員が泥酔状態だった。

「あ、阿久津さん、もしかして起つてる？」

加奈の発言で厚は自分の股間を見た。

「おお、こんな所にチヨモツンマがある。むはははは。」

「本当ですか？見せて下下さい。」

加藤が厚に寄り掛かりながら股間のバスタオルを取ると、見事に天を貫くモノが鎮座していた。

「ん~、何か変な匂いがします。」

加藤は厚のモノに顔を近づけて匂いを嗅いだ。

「つは、父ちゃんよつもおつき。」

加奈は半笑いになりながら加藤と同じように厚のモノに顔を近付けた。

「おいおい、俺も男だよ?こんなことすると襲いつかうよ?」

「はい、襲つてください。」

「うん、私も智ちゃんと一緒にお願ひ。」

一瞬、時が止まつた。

「むははははは、もう、止まらないからなー」

この日は、夜の遅い時間まで女性の喘ぎ声が聞こえた。

10：12

「智ちゃん大丈夫？」

布団に横たわるのは加藤と加奈だった。

2人とも酷い2日酔いと股間へのダメージで立つこともできなかつた。

「周囲に奴らはいなかつた。1階の安全も確認した。下に降りても大丈夫だ。」

厚が和室に入ると美香に告げた。

「わかつたわ。2人は2階で寝ててもらいましょう。食事は私が作るわ。」

「うう…」めんなさい。

「大丈夫よ、あ、阿久津さん、下から水を持って来てもらつてもいい？」

「了解。」

厚が和室を出て1階に下りて行った。

「で、どうだった？」

「…すこかつたです。今でも中に入ってる感じがします。」

「そう、加奈も同じ」と言つてたわ。午後には良くなつてゐから、心配しなくても大丈夫よ。」

「はい、今度は美香さんも一緒にですね。」

「水、持つてきた。」

厚が階段を昇り2人がいる部屋に入ってきた。

「ありがとうございます。智ちゃん、水飲んでから、もう一回寝なさいね。」

加藤は頷くと水を飲み布団に横になつた。

美香と厚はキッチンに移動すると椅子に座つた。

「昨日の夜の事覚えてる?」

「…ああ、覚えてる。」

「やつたわよね。2人から聞いたわ。」

「…それで、俺をどうするのか？警察にでも訴えるか？」

「何バカなこと言つてるの？警察に言つて誰が幸せになるの？私が言いたいのは、私も混ぜなさいって言つてるの。」

「いや、いや、おかしいだろ。すでに2股でいつ刺されるかドキドキしてるので。3股にしろってどう考えてもおかしいだろ？」

「おかしくは無いわ。私たち3人とも納得済みなの。それに考えてみて？女の子3人に言い寄られて悪い気はしないでしょ？その3人が毎晩あなたを求めてきたら幸せなことじやないの？」

「…3人からの好意はありがたいと思つけど、常識や倫理的にどうかと思うが。」

「あら？すでに常識は崩壊したわ。それに今、あなたと別れたら奴らに食い殺されるか、好きでもない男に暴行されて身籠るかのどちらかよ。」

「つーん、でもなあ、やつぱり、ちゅんとした恋愛した方がいいと思つたが…」

「ちゃんとした恋愛？今、この世界に生存者はどれくらい生き残っているか分る？それに何処かのグループに入つても恋愛でこゝでは無いわ。食糧確保だけで精いっぱいよ。」

「…だけど…」

「だけど…じゃないわ。私たちは貴方が好きなの。抱きしめたいの。セックスしたいの。それで十分じゃない。あなたに何のしがらみが

あるの？」

「…そう、だよな。俺には何のしがらみも、こだわりも無かつたはずだ。俺の事、好きって言ってくれれば、あとは俺が好きになれば問題解決じゃないか。」

「そうよ、私たちの想いを受け取つてほしいわ。」

「わかつた。3人の想いは受け取るう。3人が俺の事を好きと思う限り、俺も同じ思いの愛で答えよう。」

「…そう、でもね。そのセリフは3人揃つてから言つべきよね。」

「…ああ、たしかに。そうだな。」

「3人揃つのは晩御飯かな？」

「とりあえず、上手に言える内容を考えておくよ。今日も、ここで泊まるんだろう？進入されそうな出入り口に簾笥を置いてバリケードを作つておくよ。あ、玄関のみ簡易なものにしておくから。」

厚は椅子から立ち上がり玄関に向かつた。

昼食を終えた厚は隣家に物資の調達に一人で向かつた。

加藤と加奈は未だに調子が悪いようで、布団の中で眠っていた。

美香は2人の面倒を見る為に家に残つた。

厚の武器は腰の鞘に入つた鉈と納屋で見つけた金属バットだけだつた。

隣家までは20メートルほど田圃の中の道路を進むと玄関が見えてきた。

美香の話では老夫婦が住んでいて息子夫婦は県外に住んでいると聞いていた。

厚は家屋内に最低2体の奴らを仮想し玄関をゆっくり開けた。

そこには、食事中の奴らがいた。

食べられているのは白髪の老婆。食事中なのは頭が禿げあがつた老人が食らいついていた。

厚は物音を立てずに食事中の奴らの頭に向かって金属バットを打ち下ろしたき割つた。

(ふう、頭を割る感触は慣れないな。うわっー)

厚の足が何者かに掴まれた。

その掴んだ者は食事にされていた老婆だった。

「ちよ、まてよー」

厚は老女の腕を振りほどき金属バットで老女の頭をたたき潰した。

脳髄が飛び活動を停止した。

(くそつ、大人しく死んでるよー)

厚は厳しい顔をしながらキッチンの検索にむかった。

15：57

隣家の物資調達から帰った厚は美香に言われて風呂に入った。

湯船でくつろいでいると、脱衣所に気配を感じた。

奴らが侵入するには玄関しかなかつたが、そこには侵入された場合を考えて金タライやヤカンなどをバリケードの上に置き、簡易的な警報装置を設置していた。

完全に気を許していた厚はこの場から逃げようと湯船から立つとアガ開いた。

そこには3人の女が全裸で立っていた。

「あの、お腹中流します。」

加藤が消えそうな声で言った。

「大丈夫です。気持ちいいですか？」

加奈は真っ赤になりながらも笑顔だった。

「そんな訳で、浴室プレイにきました。」

美香はその均等のどれたプロポーションを厚に見せつけるように立っていた。

しかし、その変態的な発言で魅力は半減していた。

ただ、厚にはそれでも3人の魅力に富士山が一気にエベレストにまで膨張した。

彼らは空腹になるまで浴室内で獣のよつにお互いを求め合った。

23・43

「うめん、もう、無理。寝かせて。」

厚は布団の上に倒れると直ぐに寝息を立てて眠りに着いた。

厚はこの時間までに9発のミサイルを発射し体力の限界にきていた。

彼の周りには3人の裸の女性が布団の上に座っていた。

「もう、仕方ないわね。智ちゃん、満足した？」

「はい、腰が砕けるかとおもいました。加奈さんはどうでした？」

「私？ そうね。天国への階段は昇りかけたかな？」

「それって昇天しかけたって事？」

「うん、数えきれないくらいイツたから、太ももまでぐしょりだよ。」

「うん、確かに私たちもグツショリね。2人とも満足したなら今日は寝ましょうか。明日は移動よ。」

「そうですね、こここの居心地の良さから移動の事忘れてました。」

「智ちゃん、明日は厚さんの家に行くのよ。もし、そこが危険ならここに帰つてくるのもアリだとおもうわ。そうよね、姉さん」

「そうね。この家なら、玄関以外からしか入れないし、2階までに玄関、階段下と昇りきつた場所の3か所にバリケードがあるから結構安全だと思うわ。車にも2階から乗れるようになってるしね。」

「さあ、私たちも寝ましょう。明日に響くわよ。」

美香の言葉に加藤と加奈は従い2人は厚い抱きつくように横になつた。

彼らの先にあるのは希望か絶望か？

僕は母親と出会うことができるのか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2229y/>

---

Back-home of the Dead

2011年11月23日21時55分発行